



TITLE:

[書評] Jacques Derrida, Mémoires :
pour Paul de Man, Galiée, 1988

AUTHOR(S):

鵜飼, 哲

CITATION:

鵜飼, 哲. [書評] Jacques Derrida, Mémoires : pour Paul de Man, Galiée,
1988. 仏文研究 1990, 21: 189-190

ISSUE DATE:

1990-09-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/137758>

RIGHT:

Jacques Derrida, Mémoires
—— pour Paul de Man, Galiée, 1988

鵜飼 哲

1983年に世を去った著者の友人であり、アメリカにおける脱構築批評の中心的存在であったポール・ド・マンの思い出に捧げられた本書は、冒頭の短い回想を別にすれば、故人の作品を論じた三日間の講演録からなる第一部と、87年に明らかにされたド・マンの戦争中の活動をめぐる論争への介入を収めた第二部とに分かれている。この第二部についてはコンテクストが異なるためにここで触れることは断念せざるえない。第一部のド・マン論に限定してデリダの「喪の戦略」とでも呼びうるものの一端を紙幅の許す範囲で跡付けてみたい。

一日めの講演は《Mnemosyne》と題されている。ムネモシユネーとはギリシア神話の詩神ミューズの母であり記憶を司る女神である。冒頭に引かれたヘルダーリンの同名の詩から三つのテーマ系が引き出される。①喪の作業とレトリック、②記憶と技術、③言語の本質としての約束がそれである。

第一の喪のテーマはド・マンが「抒情詩における擬人法と譬喩」（『ロマン主義のレトリック』所収）のなかで用いた《true “mourning”》という表現の解説を目指す形で追求される。「不可解なもの」を受け入れる非抒情的な言葉の諸様態を「真の喪」として抒情詩に対置するド・マンの身振りのなかに、デリダはむしろ喪の真理の否定を、喪を本質的にレトリカルな性格を持つものとみる主張を読みこむ。その古典的定義によれば喪とは失われた対象を理想化しつつ内化することである。だが他者はその死においてかつてないほどの他者性を帯びる。この取り返しのつかない不在は取り残された「私（たち）」に故人を自らのうちに取り込むよう命ずるが、同時に「私（たち）」の限界を否定なく明らかにもする。なぜなら「私（たち）」が内化しなければならないものは対象である前に他者であり、そのこと自体において「私（たち）」よりも「大きい」からだ。これが内化が必然的に擬態を通して行なわれる理由であり、デリダによればここに「虚構の起源」が、また一般に取り込みの主体として想定されがちな一切の自己関係（「私（たち）」）の可能性の条件さえも見出される。

だが記憶の様態は必ずしも内化ばかりではない。二日めの講演はこの表現の翻訳不可能な多義性において《L'art des mémoires》と題され、男性形の mémoire(s)（「覚え書」、「回想録」）が示唆する外化された記憶としてのエクリチュールへの関連が探られることになる。考察の端緒はド・マンが82年に発表した「ヘーゲル美学における記号と象徴」によって与えられる。『エンチュクロペロディー』においてヘーゲルは Gedächtnis と Erinnerung という二つの記憶を区別する。後者が「内化する記憶」であるのに対し前者のうちでは「思惟する記憶」と「機械的・技術的な記憶」とが奇妙な形で同居している。Erinnerung はヘーゲルによって想像的形象の物質性と不可分とみなされているが、ド・マンによれば Gedächtnis も機械的暗記に不可欠な名辞の物質性と無縁ではない。デリダはこの点に着目し、記憶と思惟をつなぐこの別種の「物質性」を、名辞とその持ち主の関係を命名の最初の瞬間から規定する差延の運動として理解する。こうして記憶は過去との特権的な結び付きから解放され、『盲目と明察』所収のブルーストとボードレールの読解のなかでド・マンが語る「現在の記憶」のモチーフが浮上することになる。ここでは記憶は失われた時の再生、即ち連続性の回復ではなく、現在をその現前へと呼び戻す (rappeler) ことで二重の差異、即ち、この現在を他の現在から区別する差異と、現在と現前との差異とを刻印する。そしてこの刻印 (marque) は過去の先行性の抹消、つまりは忘却を通して到来する以上、記憶と忘却は

〈書 評〉

もはや別のものではない。

それでは内化する記憶とそれを抹消する「現在の記憶」はどのような関係にあるのだろうか。この二つの記憶が共に属するようなより「古い」記憶を「思い出す」べきなのだろうか。三日めの講演《Actes — La signification d'une parole donnée》で展開されている約束をめぐる考察はこの問いへの一つの回答の素描と考えられる。デリダは言う、「約束はつねに過剰である。この本質的過剰がなければそれは未来の記述ないし認識になってしまうだろう。その行為の構造は確認のそれとなり、行為遂行のそれではなくなってしまうだろう」と。このような約束の過剰性をルソーの『社会契約論』を論じつつ、ド・マンはその政治的帰結まで追求する。「ある言表が同時に行為遂行的であり、かつ事実確認的である」ことというド・マンのテキストの「定義」に、デリダは「この同時の時間は決して現在ではない」と注記する。言いかえればテキストには、そしてすぐれて法のテキストには記憶と約束だけがある。そして歴史を生み出すのはこのようなテキストなのである。

将来 (avenir) の思考に「あらかじめ占拠されている」(préoccupée) 約束としての記憶。だが友愛もまた、有限な二者の共現前と伝統的に定義されてきた友愛もまた、自己及び友の死を越えた不可能な約束の不可避性においてしかありえない。そのような約束の記憶のなかで、哀悼のバトスのなかで練り上げられたためか、本書における著者の思考にはいつにもまして強く触発されたことを記しておきたい。